

## 「ベニト・セレノ」のコン・マン

石 井 光 子

Herman Melville の中篇小説 “Benito Cereno” は、1855年10月から、3回に分けて *Putnam's Monthly* に連載され、後、1856年に *The Piazza Tales* に組み込まれ出版された、一見、ゴシック・ロマンス風の作品である。

冒険海洋小説で、一躍有名になったメルヴィルも、10年もたたぬうちに、書評受けの悪い、従って、売れない長篇を書く、“元” 流行作家となり、出版社も単行本に関してはリスクの大きい作家として、二の足を踏むようにすらなっていた。そこで、メルヴィルは、義父の援助で Pittsfield に農場を購入し、この Arrowhead で自ら耕作し、収入を補う目的で雑誌用の短篇小説を書き始めたわけである。

当時の通常の小説と構成を異とする中篇を読み、出版社の reader は、メルヴィルはどうも急ぎ過ぎて構成に時間をかけなかったようではあるが、話も悪くない上に、かつての名声を斟酌すれば、掲載しないのは惜しい、という、かなり控えた推薦文を社主に書き送っている。この書簡に引きずられたためか、Leon Howard は、3月に第4子が誕生し、背中のリューマチで農作業も覚束なくなったために、不安を感じたメルヴィルが、枚数を稼ごうとして、25%ほど水増ししたままの原稿で押し切った作品であるとしている<sup>1</sup>。しかしながら、F.O. Matthiessen は、「ベニト・セレノ」を、“one of the most sensitively poised pieces of writing [Melville] had ever done”<sup>2</sup> と言い切っており、“sensitive” ではない者には、あえて常套な構成を選ばなかった作者の意図は見抜けないことを示唆している。

では、「ベニト・セレノ」が、一読すればどのような小説に見えるのかを概観してみよう。

1799年、マサチューセッツの、あざらし漁船兼交易船 *the Bechelor's Delight* の船長、Amasa Delano は、チリ沖の小島 Santa Maria に給水のため停泊中であつた。そこへ漂流に近い状態で、スペイン船 *the San Dominick* が入港してくるのである。生来のお人好しを自負するデラノは、航海士達の反対にもかかわらず、援助を申し出るべくスペイン船に乗り込んでいく。山中の修道院かと思まがうような奇妙な印象を与える *the San Dominick* の甲板には、統制もとれず、つながれてもいない黒人奴隷約150名がいた。憔悴し切った船長の Benito Cereno は、忠実な黒人奴隷 Babo に支えられながら、暴風と風、懷血病と熱病のため、乗員・乗客・装具及び黒人奴隷を含む積荷のかなりを失なつたことを告げる。デラノはなぜか落ち着けず、船上の奇妙な雰囲気はいぶかりながらも居残り、セレノは海賊なのかも知れないとまで疑惑をつのらせていた。しかし、奴隷バボの、

主人への献身と心づかいを目にするたびに、あるべき秩序の保たれている船なのだと納得するのである。援助物資の金額を取り決め、もよりの港へ曳航するために自船へ戻ろうとするデラノは、突如、自分のボートに躍びこんでくるセラノ、そして、バボの姿に驚く。自分を殺しに来たのだと思い込んだデラノは、二人を取り押さえるが、バボはセラノを刺そうとしたのである。セラノを保護したデラノは、the *San Dominick* で奴隷の叛乱が起こり、白人は捕虜となり、バボの命じるままに主人役を演じさせられていたのだと聞かされる。積み荷の価値を知ったデラノは、セラノの制止を入れず、元私掠船の乗組員という経歴をもつ一等航海士に奴隷船を追撃させる。戦闘の後、拿捕した奴隷船をリマまで曳航し、スペイン副王の法廷で裁可をおおぐのである。

この純全たる物語部分に続き、法廷でのセラノの宣誓供述書の抜粋で、叛乱の経緯が明らかにされる。私の奴隷はおとなしいという持ち主 Aranda の言に従い、鎖をつけずにおいた奴隷が、出航後まもなく蜂起し、水夫を殺害したこと、主謀者バボが、近くの黒人の国、あるいは、セネガルへ連れていくよう要求したこと。バボと、その副官にあたる Atufal は命令を下しただけで、一切、手は汚さなかったこと。主人が生存しているとは自由になれないとしてアランダを殺させたこと。白人を拷問したがる女奴隷達の要求をバボが押さえ、セラノを助けたこと。デラノの前では、主人としての役を演じるよう命じたこと。そして、捕獲後、縛られた奴隷を殺そうとしたスペイン人船員を、デラノがひとりならず取り押さえたことなどが語られる。そして、再び物語形式に戻り、両船長の会話と、バボの処刑の様子及びセラノの修道院での死が語られ、小説は完結する。

批評・研究は、物語部分に集中しがちであり、Howard の言う、25%の水増しとは、この宣誓供述書の冗漫さを特に指すものであろう。J. P. Runden の版では、全75ページで、61・11・3ページの分量ながら、宣誓供述書の部分は活字を小さくしており<sup>3</sup>、Howard に近い見方をしていることを暗に示している。

例えば、構成・話者・観点に関して、Adler は、“the story is presented in three parts, all objectively narrated”<sup>4</sup> とまとめ、また、Dryden は、“in the narrative proper the reader is limited to Delano’s point of view”<sup>5</sup> とし、Seelye は “sardonic third person narrator”<sup>6</sup> と軽く言及しているに過ぎない。ただ、Bickley は、この作品における話者のもつ重要性をよく把握し、メルヴィルは “first person ironic narration” を目ざして、

... a limited omniscient narrator, one privileged to enter Delano’s mind alone, but also permitted to draw partially aside the masks that conceal the identities of Babo and Cereno.

を選んだとしている<sup>7</sup>。しかし、上記の発言は物語部分に関してのみ言えることであり、無味乾燥な宣誓供述書は、法文書らしく一人称であることを前提としながら形式は三人称という形をとっており、どうも特異な文体ではあるが考慮の必要がないものとして無視されているものらしい。

ともかく、読者は、デラノに見えたもの、及び、見えたはずのものを追いながら、彼の経験を追

体験してゆき、真相がわからぬままに戦闘場面へと導びかれていく。次に読み終えた事件の原因となった出来事が、セレノの観点から再構築される宣誓供述書によって、全ての“真相”を知り、一件落着を宣言する結末をあてがわれるのである。

事件があり、謎ときがあり、結末がある、という Poe が創始したばかりの推理小説の変型と見なすこともできる小説なのである。が、Seelye によれば、“あたかも”，“まるで” という類の語句が115使われており<sup>8</sup>，サスペンス小説というより、*Pierre: or the Ambiguities* と連なる曖昧さに満ちた、とらえどころのない不気味さをかもしだし、ゴシック・ロマンスに近いとすら感じられるのである。

しかしながら、Berthoff は、

The states of mind Captain Delano passes through are not, after all, essentially different from the ordinary ways by which we move, more or less blindly, through our works and days. So the story can fairly be seen as composing a paradigm of the secret ambiguity of appearances —an old theme with Melville— and, more particularly, a paradigm of the inward life of ordinary consciousness, with all its mysterious shifts, penetrations, and side-slippings.<sup>9</sup>

と論じ、デラノの経験の仕方こそが、現実に即したものであることを強調している。即ち、宣誓供述書の部分は、著者の力量が及ばず、退屈になってしまった“謎解き”でもなく、ましてや水増しでもない。本来曖昧なものである現実を、あるがままに曖昧に表現して見せたものが物語部分なのである。そして、この曖昧な現実と対比を成すものとして、整合性を目ざす法文書が選ばれているのである。供述書の中で再構築される筋の通った“真相”と、曖昧なはずの現実との乖離を示唆し、また、供述者・証人・裁判官さえ合意に達すれば、その合意された筋書が事実として認定され、公文書としてまかりとおるのである。絶対的な真相あるいは事実を把握することなどできるものかどうかを問うことが、著者が、この作品の構成の中に潜ませた問いかけなのである。

『ベニト・セレノ』の執筆に先だって、メルヴィルは、二幅対と言い得るような短篇を幾つか発表している。例えば、“The Two Temples”では、身なりの立派な者だけを参列させる教会と、くたびれ果てた旅装の身でも受け入れてくれる劇場を対比させ、どちらがキリスト教的かといふかってみせたり、また、“The Paradise of Bachelors and The Tartarus of Maids”では、英国有産階級の独身の紳士連の優雅な夕食の情景を、アメリカ紳士が報告し、次に、同じ語り手が、ニュー・イングランドの製紙工場で、機械の一部として働き続ける独身の女工達の姿を報告し、この対照を読者につきつけるという類の小品である。しかし、今、ここで注目すべきは、この紳士達の饒舌さに対する、娘達の沈黙する姿である。“Bartleby”においては、コミュニケーションを拒否し、無抵抗不服従を実行する書記に業をにやす語り手である弁護士の困惑が描かれるが、語る者と語らない者、あるいは、語ることのできる者と、語ることを期待されも、許されもしない者という対比

を描いたものとも考えられるのである。外見・職業・資産・階級によって、そこに居合わせることを拒否されたり、自己表現の機会を奪われたりすることを描き、また、伝わるはずもない心情は、あえて語らない、という積極的な沈黙をも描いているのである。当時のメルヴィルは『ベニト・セレノ』のための習作を続けていたようなものなのである。なぜならば、デラノの経験は描かれ、セレノの経験は語られるのに、バボの経験も観点も、決して語られることがないからである。バボの観点は、描かれた言動の中に、かいま見えるのみであり、彼自身が議論を展開することはない。彼は、書記バートルビのように、何も伝わらないことを知っているからである。メルヴィルが、『ベニト・セレノ』に、特異な構成を選んだのは、また、バボの観点が欠落していることを強調するためでもあったのだ。

三人の中心的人物像のうち、ただ、バボだけが語らない。観点が言語で表現されない登場人物は、文学作品の中では、見過ごされがちなものである。まして、月刊雑誌を購読していたのは、まず中産階級の白人であるから、読者は、“善人”デラノを自分に引きよせて読んでいたとしても不思議はない。その上、題材が奴隷の叛乱であるから、バボとバボが卒いる奴隷の思考ではなく、行動にだけ注目が集まり、バボは極悪非道・陰険・動物的という類の批評がでてくるのである。この類の評論を Adler が簡明にまとめているので、引用してみよう。

The assumption has been that Melville in this work borrowed the old symbolism of black as evil, white as good. Out of this has grown the common interpretation that Babo ... is symbolic of Evil; that Don Benito Cereno ... is the good victim of “black” iniquity; that Captain Amasa Delano of Massachusetts—who never seriously questions the enslavement of blacks and unconsciously accepts its rationale, who sees at all times only what is visible on the surface, and who learns nothing from the *San Dominick* experience, which he recommends forgetting—is innocence discovering Evil; and that slavery—without which there could be no *Benito Cereno* (sic)—is irrelevant to the story.<sup>10</sup>

そして、1941年に、既に F. O. Matthiessen が、

Although the Negroes were savagely vindictive and drove a terror of blackness into Cereno's heart, the fact remains that they were slaves and that evil had thus originally been done to them.<sup>11</sup>

と言い切っているのに、1956年に至っても、Sidney Kaplan ですら、新批評の影響でもあろう、

{Babo's} cunning ruthlessness is worthily motivated is not an issue *within the story*,

to Melville “faithful” Babo is an “honest” Iago.<sup>12</sup>

と判断してしまっている。この根拠として Kaplan は、“bestiary” が、黒人奴隷の描写に使われていることを指摘している。しかし、白人もかなり、動物に例えられているのである。例えば、バルセロナの水夫は、“bear”, “sheep”, “ursine”, “sheepish”, “centaur” (p. 29) と描かれ、他にも “fox” (p. 32), “pelican’s empty pouch” (p. 32) のようにシワだらけと言うような “bestiary” があらわれる。また、デラノが “Some prominent breaches, not only of discipline but of decency, were observed.” (p. 9) と感じる甲板上の混乱も, “The *San Dominick* was in the condition of a transatlantic emigrant ship.” (p. 10) と表わされ、白人と黒人との間には、何ら違いがないことが、目だたぬようにではあるが示されている。その上、叛乱が鎮圧された後、縛られている黒人を殺すのは白人である。ちょうど、南部でよく行なわれたリンチと同じ形であり、ここにも、メルヴィルが、黒人を野蛮とする一般的意見に組していないことは明らかであろう。

Kaplan は、見事にメルヴィルにひっかけられたと言えよう。Fisher はメルヴィルを, “something of an iconoclast”<sup>13</sup> と定義し、メルヴィルの創作態度を次のようにまとめている。

The example of Shakespeare seems to impress even more deeply on Melville that a great writer must be a genius at subversion with an awesome responsibility to a concept of truth bound to offend the conventional majority. His art is defined not only by the courage of what he dares to write, but also by the skill with which he conceals his boldest assertions. He must take on faith that there exists an intellectual underground able to appreciate his art.<sup>14</sup>

そして、メルヴィルが試みたものは、“covert communication”<sup>14</sup> であったと言い切っている。10年にもなる作家生活を経て、メルヴィルは共通感覚を持たなければ、まず、何も通じないことを学んだのである。彼は、大部分の読者には真意が伝わらぬことを受け入れ、逆に、よほどのことがない限り、真意が見ぬかれることはないという自信すらもって、一般読者の喜びそうな物語の奥に、自らが表現しようとすることを潜ませ、表面とは異なることが書かれているのだという鍵を、所々に散らしておくのである。ゆえに、Dryden は、メルヴィルの作品を指して, “what it says is quite different from what it means”<sup>15</sup> とまで言わざるを得なくなったのである。

伝わりうが、伝わるまいが、“水増し” という非難の声が上がったのには、もうひとつ理由がある。1928年に種本が発見されたのである。19世紀風に途方もなく長い題ではあるが、実在の Amasa Delano がボストンで1817年に出版させたもので、通常は *Delano’s Narrative* と呼んでいるようだが、書き下すと、

*A Narrative of Voyages and Travels, in the northern and southern hemispheres: comprising*

*three voyages round the world, together with a voyage of survey and discovery in the pacific Ocean and Oriental Islands*

と言うもので、この pp. 318~353 に『ベニト・セレノ』の骨格というべき事件が載っていたわけである。それも、航海日誌の抜粋に続いて、宣誓供述書が“Officially translated, and are inserted without alteration, from the original papers.” (p. 87) という形で収録されているのである。構成まで種本のままだと言うことになれば、たとえメルヴィルが、種本の記録の配列そのものに興味をひかれて、そのまま採用したものであろうと、手抜き・水増しのそしりを免かれるのは至難の技というべきであろう。

しかしながら、種本にメルヴィルがどのような変更を加えたかを見れば、著者の意図がより明確になるのは言うまでもない。まず、小説ではデラノは“valuable cargo” (p. 1) を積んで停泊中であるが、史実のデラノは一年半の航海のあとながら、一人当たりの取り分が、20ドルにも満たない状態であった。また、有能な水夫には逃亡され、代わりを囚人で補充するものの、また逃げられるという状態で、万策つきはてたという所だった。そこへ漂流するような形で the *Tryal* が入港したのである。奴隷を70名も積んでいるのであるから、水と食料の代金だけでもかなりのもの、と近づいてみる。が、意外や追撃・拿捕にまで事は運んだ。結局は、8,000ドルもの報酬を得ることができたのである。

史実のデラノも善良な紳士のつもりでいるが、奇妙に金銭に関しては細かく、追撃の際に錨のケーブルを切らなかったのは、保険の掛け金が上がっては困るからであり、読者諸氏も冷静な判断力の重要性は、心に留め置かるべきであると説教までして、自らの経営能力を誉め賞えるのである<sup>16</sup>。

元逃亡船員のメルヴィルにとって、通常の操業では利益もあげられず、水夫に逃げられ続け、説教癖まである船長というだけで、どんな人間であるかは、すぐに想像がついたことであろう。その男が手記まで書いて、何を考えていたのかを明らかにし、釈明まで付けているのであるから、メルヴィルが興味をそそられないわけではない。

この船長は、600ページに及ぶ体験談を自費出版させ、扉に肖像写真までつけている。Dillingham は、この顔が、メルヴィルの興味をそそったにちがいないと言い切るのである。陽気な丸顔には、“blank and a bit sleepy in spite of their being wide open.”<sup>17</sup> という呆けたような目がついているからである。そして、世界中を見てまわったのに “singularly devoid of insight”<sup>18</sup> と言われる手記には、自己満足と鈍感さが、満ちあふれている。例えば、支払いを拒否した本物の *Sereno* から現金が届いた時の感想は次のようなものである。

The last transaction brought me the money in two hours; by which time I was extremely distressed, enough, I believe, to have punished me for a great many of my bad deeds.

When I take a retrospective view of my life, I cannot find in my soul, that I ever have done any thing(sic) to deserve such misery and ingratitude as I have suffered at different periods, and in general, from the very persons to whom I have rendered the greatest services.<sup>19</sup>

悔い改める善人であることを誇示したその舌の根も乾かぬうちに、あんな目に合わされる覚えはないと自己正当化を計り、愚かにも、偽善的な上に独善的でもあることを自ら露呈してしまっていることに気づかないのである。

一方、実在した Sereno も、中世騎士道精神の名残を漂よわせ、奴隷に裏切られたショックで衰弱死するような神経質な貴公子ではない。収監されていた逃亡水夫から、“デラノは海賊である”という証言をとりつけ、支払いを免がれようと計り、かえって、誇り高い副王の怒りを買ひ、支払いはしてやる代わりに、地下牢に入れてやると言われて、あわてて支払うという<sup>20</sup>、Yankee peddler 顔まけの守銭奴である。

しかし、メルヴィルは、この貴族的名誉心とは縁もゆかりもない Sereno を、作品では、神聖ローマ帝国皇帝カルロス 5 世の後継者として描いているのである。Franklin によると、『ベニト・セレノ』には、“a source in many ways more important than Delano’s *Voyages*— William Stirling’s *The Cloister Life of the Emperor Charles the Fifth*”<sup>21</sup> があり、また、種本と言うだけでなく、当時の小説好きなら読んでいるはずのものであり、メルヴィルのセレノは、カルロス 5 世と二重映しになったものと考えられるのである。両作品を詳細に比較検討してみると、“almost every trait of Cereno is a trait of Charles”<sup>21</sup> となり、人物像だけでなく、家具調度から建物、人間関係に至るまで重なることがわかると言うのである。Franklin は、セレノの姿にカルロス 5 世の像を反映させて、“the final disintegration of the Spanish New World Empire”<sup>22</sup> を描き、また、臣下のドミニコ派修道僧に操つられるカルロスと、奴隷に操つられるセレノを重ね合わせ、人の信頼を裏切るものとしての教会及び宗教を描いていると結論づけ、両作品は共に、“highly intense explorations of the meaning of man’s gods.”<sup>23</sup> としている。

Franklin の解釈は、『ベニト・セレノ』及びメルヴィル理解を一步前進させるものではあるが、1855年に、カトリック教会の裏切りを批判する目的で、奴隷の叛乱を描いてみせるなどというのは、例えば、第二次世界大戦中に、家族制度のゆがみを批判するために、ワルシャワ・ゲトーの蜂起を描いてみせるようなものである。Aptheker は “the “cause” of slave revolt was slavery”<sup>24</sup> と言い切っているが、これほどに絡みあった問題の片方を描いて、もう一方は “irrelevant”<sup>10</sup>、あるいは “not an issue within the story”<sup>12</sup> あるいは、言及すらしないという解釈を行なうこと自体に問題がありはしないだろうか。むしろ、南北戦争を 6 年後にひかえる時期に、あえて奴隷の叛乱を描くという危険をメルヴィルが冒していることに着目すべきではなかろうか。『ベニト・セレノ』は、奴隷制度と、この制度を許す体制を題材としているのである。

まず、1855年までのアメリカ合衆国を見てみよう。独立以来、“イギリスが植民地に押しつけた

醜い制度”<sup>25</sup> である奴隷制が残っていること自体が懸案となっていた。また、1780年代からの Santo Domingo での奴隷の叛乱及び1804年の独立達成は、南部では、常に気にかかるものであったし、1831年の Nat Turner の乱を契機として、白人のヒステリアだけは、充分につのり、あるいはない叛乱計画を“発見”し、黒人を虐殺する事件は頻発していた<sup>26</sup>。また、北部では、奴隷解放論者が組織化しはじめた1830年代から、しきりに暴動が起こり、社会の指導者層が中心となって、奴隷解放論者やその印刷所を襲い、最も激しかった1835年には、報告されているだけで53件もの襲撃が行なわれている<sup>27</sup>。週に一度の割である。1837年には、穏健派の奴隷制反対論者の Elijah Lovejoy が殺害されている<sup>28</sup>。“Amalgamation”という語があるが、これは、現代の“miscegenation”つまり、異人種間の雑婚を、特に白人女性と黒人男性との結びつきを示す語である。“奴隷を解放すれば、白人女性を妻にしたがるものであり、奴隷解放は、白人女性の純潔を穢すものである”、“Amalgamation”と叫べば、群衆は暴徒と化したという状況であった<sup>29</sup>。

1840年代には、しばらく領土拡張に目が向いていたが、1848年、Guadalupe-Hidalgo 協定により、メキシコから広範な土地を奪うと、北部の自由農民“free-soiler”と、南部の荘園制度のどちらが準州を支配するかが問題となった。1850年には、Fugitive Slave Act と抱き合わせで Compromise of 1850が議会を通過し、準州では居住するものの意向が尊重されること及び、自由州に逃げこんだ逃亡奴隷は官憲の手によって手数料10ドルと引き換えに、所有者に返還されることとなったのである<sup>30</sup>。北部は、南部の奴隷制度を積極的に擁護することとなったわけである。その上、ストライキが頻発し、労働運動が活発になり<sup>31</sup> 綿花の値上がりもあり、ストライキをしない労働力としての奴隷の値段が上昇してきたのである。1850年代には、奴隷貿易再開の要求すら出始め<sup>32</sup>、南部は準州に奴隷を持ち込み、北部の独立自営農民と競合させようとしていた。

この時期に、奴隷制度を糾弾する小説など書くわけにはいかなかったのである。ましてや、メルヴィルの義父は、マサチューセッツ州最高裁判所長官として、逃亡奴隷法に忠実な判決を下していたのである<sup>33</sup>。とても、逃亡奴隷を捕えても所有者に返還してはいけないと、直截に書くわけにはいかず、カルロス 5 世の像を重ねあわせ、当時のアメリカ合衆国とは無関係であるかのように仮面をかぶせた小説を書いたのである。

では、メルヴィルの『ベニト・セレノ』の素顔を見てみよう。まず、Franklin が指摘した教会や王権との絡みでは、16世紀初頭に、改宗を目的とするならアフリカ人を奴隷にしてよいという教皇教書が出ており<sup>35</sup>、また、カルロス 5 世は、西半球で最初の大規模な奴隷輸入に勅許状を与え、サント・ドミンゴを集散地とする奴隷貿易の推進者となったのである。後年彼は、西半球における全奴隷を解放すると宣言したが、退位とともに、奴隷制は復活され<sup>35</sup>、セレノの時代にまで、続いていたのである。セレノは、一旦、積み荷とともに船を諦め、デラノに追わないようにと告げている (pp. 58-59)。しかし、船を失ない船長ではなくなったセレノには、何を命じる権限もなく、奴隷はデラノによって捕獲される。デラノは、皇帝の退位後、奴隷制を復活させた者と同じことをしているのである。そしてまた、デラノは、スペインが新大陸に持ち込んだ奴隷制を引き継いだアングロ・サクソンをも代表し、そしてまた、逃亡奴隷法に従って、報酬を得て逃亡奴隷を南部へ返



還する北部をも表わしているのである。

次にジェームズ 1 世が言及される。

No sword drawn before James the First of England, no assassination in that timid King's presence, could have produced a more terrified aspect than was now presented by Don Benito. (p. 43)

この比喻は読者をひっかける目的でつけ加えられたものであろう。なぜならば、臣下に首を刎ねられたのはチャールズ 1 世であり、憶病な王はジェームズ 2 世だからである。ここで言及されるジェームズ 1 世は、スペインと西半球の覇権を争い、Virginia Company に勅許状を与え、後、南部奴隷州の基礎となる Jamestown を建設させた王であり、デラノの出身地であるマサチューセッツヘビルグリムズ・ファザーズをたどりつかせるに至った王でもある。

また、デラノは、ムラトの給仕係を賞めて、“Your steward here has features more regular than King George's of England.” (p. 46) と言うが、ここで言及されているジョージ三世は、独立宣言文草案において人非人と非難された王である。

その条項には、ジョージ三世が、「一度として彼にそむいたことのない避遠の地に住む人びとを捕え、別の半球で奴隷にするため連れ去ったり、あるいはその輸送途上で悲惨な死に至らしめたりして、最も神聖な彼らの生命と自由の権利を侵害し、人間性そのものに対し残忍な挑戦を行った」と書かれていた<sup>46</sup>。

彼は、アメリカ植民地に奴隷制を押しつけただけでなく、アメリカ植民地のイギリス人をも奴隷としようとした王として攻撃され、独立革命によって植民地を失ない、失明し、発狂するのである。

このように、メルヴィルは、西半球の奴隷制度に関わった権力者の名前を、小説の荒筋とは無関係に散らして、実は、本当は奴隷制を主題としていることを示唆しているのである。

しかし、メルヴィルは、ただ奴隷制度だけを描いていたのではない。これらの権力者への言及は、権力・絶対君主制をも思い起こさせるためのものである。18世紀中期からの共和主義への流れは、アメリカ革命・フランス革命、中南米での独立運動へと続いた。サント・ドミンゴの独立も、この流れの一部である。そして、1848年の2月革命・3月革命において絶対君主制は崩壊したはずのものであった。しかし、1852年にナポレオン 3 世の即位により、絶対制は亡霊の如くよみがえったのである。セレノが、“ghost”, “phantom”, “hobgoblin”, “somnambulist” と喩えられながら、同時に “despotic”, “dictatorship” と、結びつけられているのは、そのためである。

もちろん、セレノはバボによって暴君を演じさせられていた傀儡である。しかし、セレノを指揮官であると信じるデラノの態度は如何なものであろうか。雑然とした甲板を見たデラノは “What the San Dominick wanted was... stern superior officers” (p. 10) と考え、“the absence of ... the police department” (p. 9) を憂慮するのである。また、黒人の子供が、喧嘩の際中にスペイン人の子供に切りつけると、デラノは “Had such a thing happened on board the Bachelor's Delight, instant punishment would have followed.” (p. 15) とセレノにあてこすりを言い、“this

hapless man is one of those paper captains I've known, who by policy wink at what by power they cannot put down?" (p. 15) と考え、押さえつける権力を持たぬセレノを哀れむのである。そして頭に乗って、管理技術に関する忠告まで行なう。

"I should think, Don Benito,... that you would find it advantageous to keep all your blacks employed, especially the younger ones, no matter at what useless task, and no matter what happens to the ship. Why, even with my little band, I find such a course indispensable. I once kept a crew on my quarter-deck thrumming mats for my cabin, when, for three days, I had given up my ship—mats, men, and all—for a speedy loss, owing to the violence of a gale, in which we could do nothing but helplessly drive before it." (pp. 15-16)

奴隷を統括する士官、懲罰、そして、余計なことを考えないように無駄でもさせておく単純作業が、デラノのいう船長らしさの特長なのである。

メルヴィルは、『ホワイト・ジャケット』において戦艦の世界を描き、奴隷制度糾弾を行なっているが<sup>37</sup>、まさに、デラノにとっては、奴隷も水夫も同じものであり、"mats, men, and all" (p. 16) という語順に表われているように、敷物の方が人間より重要なのである。もちろん、彼は共和主義者のつもりでいる。ゆえに救護物資が届き水を配るよう依頼されると、"He complied, with republican impartiality as to this republican element, which always seeks one level, serving the oldest white no better than the youngest black" (p. 37) と平等を強調して分配するが、自分が水を与えてやるために、奴隷のひとりをしかりつけ、全員平等に扱ってやることを誇る絶対君主になりきってしまうのである。そして、セレノには余分に水を配り、白人のために白パンとサイダーを用意させるのである。彼の共和主義は水までには適用されるが、白パンは白人のものであり、それ以上は船長のものなのである。人種差別と階級制度が、水以上のものには適用される。つまり、彼の共和主義とは生存を許すというだけのものである。

日も暮れかけてきた頃に、デラノはセレノを自船に誘い "My old steward will give you as fine a cup [of coffee] as ever any sultan tasted" (p. 52) と言う。カルロス 5 世を脅やかし続けたスレイマン大帝への引喩でもあろうが、それ以上に、サルタン以外は、全員サルタンの奴隷という体制を引き合いに出して、サルタンも味わったことのないコーヒーを飲む船長が奴隷に等しい乗員の上に君臨することを表わしているのである。

封建制の色濃いスペイン貴族の奴隷船と、共和主義体制の下にある商船とは、究極的には同じ原理を分かちあっているのである。ゆえに Dryden は、"Seguid vuestro jefe" (Follow your leader), (p. 4) という標語に着目し、次のように結論づけるのである。

The world represented by the "San Dominick" is a feudal one... This is a "follow

your leader” world.... When the chief mate of the “Bachelor’s Delight” directs the attack on the “San Dominick,” he reveals the essential similarity between the worlds of the two ships by directing his men to “Follow your leader”.<sup>38</sup>

しかし、この標語を選んだのは、バボである。バボは、新しい jefe に従わねば、以前の jefe の後を追うことになるぞと白人を脅やかし続けているが、この jefe は、leader というより master と訳されるべき語であろう。ただ master と言えば slave が連想され、固定した関係を思わせる。『ベニト・セレノ』では、leader あるいは master が次々と変わっていくため、あえて leader という語を当てたものと思われるのである。そのうえ、leader には、指導力によって頂点に立つという意味合いもあり、どうも世襲制の響きがある master とは意を異にするのである。片や共和主義、片や封建主義という差である。

この標語をかかげたバボは、セネガルでも奴隷であった。一方、副官の Atufal は王であった。即ち、アフリカにおいても、平等など存在せず、the *San Dominick* や the *Bachelor’s Delight* と同じ階級制が存在していたのである。事実、19世紀には、Ashanti は、かなり高度な封建制を築いていた<sup>39</sup>。元奴隷の奴隷バボは、叛乱という緊急事態を前に leader となっただけのことであって、例えば、彼の要求したセネガルへ帰れば、どうなったかはわからないのである。また、叛乱に加わった奴隷達もバボやアテュファルなどの leaders が殺されると、統率がとれず、あっさりと逮捕されてしまっている。彼らは、leaders がなくとも、現実に対処できるだけの確立した自我をもたず、共和主義を支えられるほどの個人の集団だったわけではない。叛乱が成功していても、バボかアテュファルの下で、セレノやデラノの水手と同様に、leader とは名ばかりの master をもつしかなかったことであろう。Rogin が “Melville... identified feudalism with slavery”<sup>40</sup> と言い切っていることを考えると、彼らには暗澹たる将来があっただけだと思えないのである。

The *San Dominick* の世界も、the *Bachelor’s Delight* の世界も、共に共和主義とは、ほど遠いものではある。しかし、前者が名誉指向であるのに対して、後者が金銭指向であるという差異はある。デラノは、セレノの貴族的な横顔を見て、“a true hidalgo Cereno” (p. 21) と感嘆し、この貴族を疑ぐった自分にあきれる。ここには、いかにデラノが外見に左右されるか、また、共和主義者にはあるまじき貴族崇拜の信奉者であるかが表わされているが、また、同時に、セレノの貴族性・騎士道精神も表わされているのである。Elkins は、英国のブルジョワ的価値基準と相容れないスペインの貴族的価値観を “the chivalric concept of the *hidalgo*, the man who did no work with hands and to whom business was contemptible”<sup>41</sup> としており、二文化の出会い、商人と騎士の出会いに似たものとしている。

セレノが、奴隷に斧を磨かせているのだと聞いたデラノは、“You are part owner of ship and cargo, I presume, but none of the slaves, perhaps?” (p. 16) と皮肉ってみせる。デラノは、律義な商人なのか、計算高い商人なのかとあてこずっているわけだが、“impatiently” に返答し、卒倒しかけるセレノには、この質問そのものが穢らわしいのである。名誉が何ものには優先する

hidalguismo を具現するセレノにとって、商人扱いされることが既に屈辱的なのである。

この hidalguismo を経済的に支えるものは奴隷制度である。しかし、Patterson は、“extra-economic role of slaves”<sup>42</sup> について、

... first, in all slave societies the slave was considered a degraded person; second, the honor of the master was enhanced by the subjection of his slave; and third, wherever slavery became structurally very important, the whole tone of the slaveholders' culture tended to be highly honorific. (In many societies the sole reason for keeping slaves was in fact their honorific value.)...

Because honor envelops “the whole man,” it is seen as an intimate personal quality relating to both his physical and characterologic attributes. A person's will and intentions are the two vital ingredients in any assessment of his honor by others.... Furthermore, a freely established relation of dependence with a more powerful patron can be the basis for expanding one's honorific claims vis-a-vis one's equals. The client's attachment also firmly establishes him in a place within the hierarchy of honorable statuses. He belongs and is one with his patron as a member of *their* society. The patron needs him as much as he needs the patron, and this is fully understood by both parties.<sup>43</sup>

と論じ、合衆国南部の “the chivalric cult” も、この一例であるとしている<sup>44</sup>。

名誉ある主人に属することは、奴隷にとっても名誉なことであるという “神話” が成立しているのであるから、アランダは、生命を賭しても、自分の奴隷は “all tractable” (p. 63) と言わねばならなかったし、同じ hidalgo であるセレノも、生命を賭しても、この発言を信じなくてはならなかったのである。二人は生命をかけて、自分達の奴隷は、自分達に属することを名誉なことだと考えていることを証明しなくてはならなかったのである。

奴隷の叛乱は、“degraded person” が、“patron” を、“patron” として従うに値いしない、と宣言することであり、決闘程度では修復でき得ない名誉の喪失を意味するのである。セレノは奴隷バボに殺してもらえず、主人役を演じさせられたのである。Rogin は、この役割の逆転を次のように意味づけている。

By forcing Don Benito to play the part of master, Babo has forced him to mistrust the patriarchal, domestic relations which had constituted his identity.... Babo tortures him with an exaggerated fidelity that mocks the paternalism of master and slave.<sup>45</sup>

バボは、セレノのアイデンティティを支えていた hidalguismo を根底からひっくり返し、セレノ

の世界観を崩壊させてしまったのである。

保護されたセレノは、デラノに進撃をやめるよう “entreat” (p. 58) する。騎士が商人に懇願までするのは、騎士の名誉を嘲り、奴隷以下に卑しめたバボが、平民デラノに捕えられ、ただの小柄な奴隷として扱かわれることが耐えられなかったためなのである。バボを見ることができなかったのも、小康状態にあったものがリマに近づくと衰弱し始めたのも、失なった名誉ゆえである。騎士であり *hidalgo* であるスペイン副王の前に、奴隷に支配された男として姿を現わすことが耐え難かったからである。セレノは、名誉を失ない “the whole man” を失なったために “Mount Agonia” (p. 75) に葬むられるのである。

しかし、実利的なデラノにとって、追撃を制止しようとするセレノは、“one whose spirit was crushed by misery,” (p. 59) つまり、名誉を失なうというような心理的な原因からではなく、物理的な要因から正気を失っている男なのである。デラノが少しでもセレノを理解できれば、“misery” ではなく、“disgrace”, “betrayal” “ignominy” を考えるはずなのである。船も積荷もいらないと言うほど愚かしいことはないのである。追撃が決まる。しかし、この船長の決定に対し、航海士達は、“for reasons connected with their interests and those of the voyage, and a duty owing to the owners, *strongly objected* against commander’s going” (p. 59. 下線筆者) と、異を唱え、入れられる。上令下服の船といえども、株主の指向が優先するわけで、大義は利潤追求にある。デラノの代わりに指揮をとるのは元私掠船員である。私掠船と言えば聞こえはいいが、なんのことはない海賊である。そして “Take her, and no small part shall be (yours)” (p. 59) に呼応する関の声と道具立てが揃えば、これは襲撃に向かう海賊船以外の何物でもない。ボートに躍り込んでくるセレノをみて、デラノは “this plotting pirate means murder !” (p. 56) と叫んでいるが、切込隊を送って船をのっとるのはデラノの方なのである。

この “a true *hidalgo* Cereno” は、やはり海賊ではなかったと納得するデラノが “*exerting his good nature to the utmost, insensibly, he came to a compromise*” (p. 35) と描かれる箇所がある。この “*compromise*” と “*hidalgo*” は、作品中、どちらもただ一度だけ使われ、妙に浮きあがる語なのである。ここで、デラノの “*good nature*” がこの作品においては、似非共和主義の同義語であることを思うと、似非共和主義を最高に発揮して到達した愚かな妥協とは、明らかに *Popular Sovereignty* を錦の御旗にして通過させた “1850年の妥協” を指すものである。この妥協の原因は、メキシコ戦争と、その結果まとまった *Treaty of Guadalupe Hidalgo* でメキシコから奪った広大な土地なのである。

ところが、聖母マリア信仰がメキシコで土着化したものが、Guadalupe の聖母に対する信仰であるから、この協定の名前は、聖母—貴族協約となり、Santa Maria 島で、“a true *hidalgo* Cereno の財産が、Yankee によって捕えられ、一部所有権が移るという、小説全体の構図がアメリカ合衆国が19世紀になってからメキシコに対して示した拡張主義 *Manifest Destiny* を模するものである。そして、また、ローマ教会、カルロス 5 世、ジェームズ 1 世などが引喩として使われていることから、トリデシラス協約により法皇庁から与えられた西半球、法王教書で許可された布教を名目

とする奴隷制,そして、この封建的奴隷制にとってかわる利潤追求原理による資本主義奴隷制,スペイン帝国から、新興国アメリカ合衆国の手に移っていく西半球の土地がすかしみえてくるのであって、旧帝国主義にとってかわる、合衆国の新帝国主義の姿、古い海賊にとってかわる新しい海賊というアメリカ合衆国の姿が浮かびあがってくるのである。

また一方で、逃亡する奴隷と Yankee の関係は、奴隷を “fugitives”, Yankee を “assailants” (p. 59) と呼んでいることから、逃亡奴隷を、賞金目当てで捕え、南部の持ち主に返還する北部の姿を描いていることは確実である。そして、“But to kill or maim the negroes was not the object. To take them, with the ship, was the object” (p. 60) とあるのは、北部人がここで商品としての奴隷を追っていることを明らかにしている。しかし、“殺し、不具にすること”を目的としたものではないと、わざわざ言及しているのは、Nat Turner の乱の後の南部人の態度を示すためのものではなからうか。デラノの追憶の中に登場する遊び仲間が、なぜか “cousin Nat” (p. 34) であることも、必然性がないだけに、引喩としか考えられないのである。とにかく、Nat Turner の乱で、白人60名が殺されているが、その報復として、黒人が少なくとも100名は殺され、不具にされた者も多数であった<sup>46</sup>。経済性だけを考えるなら、理解できない反応である。ちょうど、追撃の後、スペイン人水夫が、縛られた奴隷を殺そうとして、一度となくデラノに止められているのは、この南部白人の姿を反映しつつ、また、一見すれば、ヒューマニストのデラノを表わし、実は、商品の破損を気づかう商人デラノの姿を表わすものであろう。

では、メルヴィルがデラノをどう描いてみせたかを見てみよう。デラノには、終始一貫して善良さを示す形容詞がつけられているが、似非共和主義者・階級制信奉者・白人優越主義者であることは明らかである。この姿は本当にデラノひとりのものであろうか。

Deburg は19世紀アメリカ合衆国の大衆文化にあらわれる黒人像・奴隷像を分析している。彼によると、白人の paternalism に対して “sambo” があり、romantic racism に対して “enslaved noble savage” が二極分解した形で定着していた。“sambo” とは、主人の保護と指導を必要とする永遠の子供であるが、“noble savage” は、奴隷であることを恥じる誇り高い野生児であって、極度に自己破壊的、つまり、すぐ自殺するのである<sup>47</sup>。デラノは黒人を好んでいるつもりだが、“Captain Delano took to negroes, not philanthropically, but genially, just as other men to Newfoundland dogs.” (p. 41) なのであり、少年期のデラノが愛したボートも “as a Newfoundland dog” (p. 34) 家の前に横たわっていたのである。黒人は忠実な愛犬かボート程度のものであり、決して人間ではないのだ。黒人の母子を見るとデラノは “There’s naked nature, now; pure tenderness and love” と感動し、女達を眺めて “like most uncivilized women, they seemed at once tender of heart and tough of constitution; equally ready to die for their infants or fight for them.” (p. 30) と、黒人の女・子供は自然の一部のようにとらえ、自己破壊的なまでの母性本能を感じとるのである。しかし、ここに示唆されているのは、“the common assumption that black women were especially passionate, ... The Negro woman was the sunkissed embodiment of ardency: ... offering the best possible justification for their [white male] own

passions.”<sup>48</sup> という異人種間雑婚に関する一般的態度である。また、同様に一般的ながら公けにはされない考えが、“black men were particularly virile, promiscuous, and lusty”<sup>48</sup> である。バボはデラノを乗船させるにあたって、体軀の立派すぎるアテュファルに首輪と鎖を付けさせ、また、自分は、“feminine, wifely”<sup>49</sup> に振るまい、去勢された男としてセレノに仕えて見せている。前掲の Jordan によると：

The white man's fears of Negro sexual aggression were equally apparent in the use of castration as a punishment in the colonies... Castration of blacks clearly indicated a need in white men to persuade themselves that they were really masters and in all ways masterful, and it illustrated dramatically the ease with which white men slipped over into treating their Negroes like their bulls and stallions whose “spirit” could be subdued by emasculation.<sup>50</sup>

アテュファルを眺め、“This is some mulish mutineer, thought Captain Delano, surveying, not without a mixture of admiration, the colossal form of the negro” (p. 18) と、ラバに喩えて安心感を得ようとする反応の仕方は、まさに Jordan の指摘するものである。

白人優越意識にこり固まり、意識下の恐怖をバボにとりのぞいてもらったデラノは、良き御主人様として黒人達に接しようとする。奴隷には “mitigated treatment”<sup>51</sup> を用いることが推められていたので、デラノは “to enforce his words making use of a half-mirthful, half-menacing gesture” (p. 36) と、分をわきまさせようとし、セレノの態度は “not... charity enough” (p. 8) なのではないかと懸念する。また、minstrel show などでは “black slaves were so obtuse as to exchange the hope of freedom for a few deceptively kind and flattering words”<sup>52</sup> とされていたが、デラノは、“Faithful fellow!... Don Benito, I envy you such a friend; slave I cannot call him.” (p. 13), “I should like to have your man here, myself— what will you take for him? Would fifty doubloons be any object?” (p. 27) などと、バボに聞こえるように言い、本気にしたように演じるバボを見て満足するのである。しかし、奴隷をつけあがらせるような、“This is an uncommonly intelligent fellow of yours, Don Benito”. (p. 47) というセリフは、バボに聞こえないように、セレノにだけ、ささやくのである。

こうして、デラノは緩急自在に奴隷を操っているつもりになっているが、実は、白人の “every change in mood” を読みとることが “a well-planned survival game in which the slaves, of necessity, had to know more about the slaveholders than the slaveholders knew them.”<sup>53</sup> であり、バボは、デラノが善人ぶりたい白人であることを鋭く理解して、暴君セレノをなだめる役を演じさせたのである。

バボが読みとったデラノは、特に気嫌の良い自己満足の塊である。セレノに感謝されたデラノは次のように答える。

Yes, all is owing to Providence, I know: but the temper of my mind that morning was more than commonly pleasant, while the sight of so much suffering, more apparent than real, added to my good-nature, compassion, and charity, happily interweaving the three. (pp. 73-74)

どうも、神の意志以上に、彼の上気嫌と善意が叛乱の鎮圧に役立ったような言い方である。

冒頭でメルヴィルは、デラノに “more than ordinary quickness and accuracy of intellectual perception” (pp. 1-2) があるかどうかは賢者にしか決められないと説明し、最も縁遠い人物であることを示唆しているが、知的感得力以上にデラノに縁遠いものは思考という行為そのものである。謎に謎がかけられてゆくような状況にあって、現状を理解しようと試みはするのである。しかし、彼の頭がついてこない。

Ah, these currents spin one's head round almost as much as they do the ship. Ha, there now's a pleasant sort of sunny sight; quite sociable, too. (p. 29)

あるいは、

Though ashamed of the relapse [into his old trepidations], he could not altogether subdue it; and so, exerting his good nature to the utmost, insensibly he came to a compromise.

Yes, this is a strange craft; a strange history, too, and strange folks on board. But—nothing more. (p. 35)

Coupling these points, they seemed somewhat contradictory. But what then, ... these Spaniards are all an odd set; the very word Spaniard has a curious, conspirator, Guy-Fawkish twang to it. And yet, I dare say, Spaniards in the main are as good folks as any in Duxbury, Massachusetts. Ah good! At last “Rover” has come. (pp. 35-36)

外界の動きにすぐに反応し、自分自身の思考の流れを断ち切っても、何とも思わない。むしろ、思考の怠惰が彼の特長であり、考えることをやめるために、“ほら、日射しがいい”，“ほら、ボートが来た”と理由をつけ、“Nothing more”ですませてしまうのである。

その上、彼は疑ぐり深くない温厚な善人でありたい。しかし、セレノは名門出身を装おい仮病まで使って自分を殺そうとしている海賊ではないかという疑いが頭にこびりついているのである。と、折よくセレノの横顔の美しさに気づき、本物の貴族の横顔であると納得し、“he might ex-



tremely regret it, did he allow Don Benito to become aware that he had indulged in ungenerous surmises” (p.21) と考える。つまり、デラノは“ungenerous”なことは考えたくないという以上に、“ungenerous surmises”をもったことを人に知られたくないのである。他者にどう見せるかが問題なのであって、本質的に自分がどうかはそれほどかまわないのである。

その上、セレノは、どう考えても危害を加えることなどできないほど衰弱しており、デラノにとっては奴隷は愚かすぎて陰謀など計画できるものではない。それなのに、殺される、殺されると疑い続けるというのは、決して、状況が把握できないほどに“undistrustful”ではなくて、ただ憶病で疑ぐり深いのである。彼は思考を停止し、自分の感情をなんとか操作して、感じたくないことは感じなかったことにし、自分に都合のよいものだけを見続けるのである。

ゆえに、バボにからかわれ続けていることにも気づかないのである。黒人は“indisputable inferiors” (p. 41) と確信しているために、本気で相手にする気がないせいでもあるが、やはり愚かで鈍いのである。急に咳き込むセレノをさしてバボは“these fits do not last long; master will soon be himself” (p. 11) とデラノに言うが、これは、だしぬけに痼癰を起こした主人が落ち着くのを待つ奴隷どうしでしか口に出さないセリフである。バボがセレノの髭をあたり、心理的拷問にかけて見せても、スペイン帝国の権威の象徴である国旗を整髪用の前かけに使って見せても、おびえるセレノに“warm breath”をふきかけ、symbolic rapeであることを見せても感づかないのである。バボが自分で頬を切って“only the sour heart that sour sickness breeds made him serve Babo so; cutting Babo with the razor,” (p. 45) と、主人の心は恨み深い陰湿なものだと断言し、“その恨み深い心が、主人をこのようにバボに仕えさせる”とまで言ってみせても、“こんな目におあわせになる”と言っているものと信じているのである。

奴隷制反対を叫べば身に危害が及んだ時期に、メルヴィルは、善人面をした北部“紳士”を黒人奴隷にからかわせたのであるが、筆者は寡聞にして、メルヴィルが襲われたという話は聞かない。大部分の読者は、善意の共和主義者デラノが、中世風的美貌のスペイン貴族を助け、奴隷の叛乱を鎮圧して英雄となる小説を読んだのであろう。そして、善意の共和主義者を自分に重ねあわせ、黒人は陰險・残酷・動物的という、以前からの偏見をより一層強くしたことであろう。

メルヴィルは、ちょうどバボがデラノをからかったように、隠し絵を散りばめた小説でデラノのような一般読者をからかっているのである。そして、一見リベラルなつもりの北部人すらが、独立宣言の意味をなくさしてしまう奴隷制を黙認しており、有色人種差別と白人優位主義という。本来の republicanism とは相容れない意識を、ただ自分に都合がいいからという immoral な理由でもち続けており、たまたま、北部が奴隷制度をもたないというだけの理由で南部人より高潔なつもりでいるということをあらわしている。もちろんこの原因は、デラノと同じ、思考の停止と感性・感情の操作である。

デラノはセレノがバボの頬を切ったと聞いて、“Ah this slavery breeds ugly passion in man” (p. 91) と、よく南部人に対して言われたセリフをはくが、これは、白人優位主義という ugly passion をもつデラノにも言えることなのである。デラノはセレノが“innocent lunacy, or wicked

imposture” (p. 20) のどちらかのせいで奇妙な行動をとるのだと考えているが、“黒人は神が白人に与えたもうた生まれつきの奴隷である”<sup>54</sup> と考えること、そのこと自体が “innocent lunacy, or wicked imposture” のどちらかでしかないはずなのである。

そして、“独立宣言に標榜される” 自明の真理に全くそぐわないアメリカ合衆国の姿が糾弾されるのが、宣誓供述書の部分によってである。判事や書記は、王と教会と地方政府を代表し、白人だけが集まって供述をつきあわせ、審議を行ない、“事実” が創りあげられる。動産である奴隷は、法廷で証言する権利も義務ももたないので、黒人の供述はない。しかし、たとえ発言を求められても、バボが沈黙を守るのは、裁判を始める前から、判決は決まっているからである。

バボの処刑は、中世の伝統にのっとった残酷なものであるが、ここで、小説の始めから宗教裁判・異端審問のイメージを引喩ながら漂よわせ続けたことの意味が明らかになる。小説としては18世紀末、しかし史実ならば、1805年、つまり19世紀になっても、判決が最初から決まっていた、裁判そのものが茶番劇でしかない裁判、黒人も人間だと考えれば異端とされ、処刑されるのである。三権分立の意味が全くない、法の精神など、どこにも存在しない世界が描き出されているのである。

しかし、メルヴィルは、即事奴隷解放を叫ぶほど単純ではない。リベラルなつもりの北部には根強い人種偏見があり、南部の有力者は、経済性とは無関係に、自らのアイデンティティを奴隷の主人であることに依拠させるほどに、ゆえに、生命も賭けかねないほどにまで奴隷制度の内に捕えられている。その上、安定した生産労働力として南北双方にとって手離せないものとなっている。奴隷は従うことだけしか学ばされておらず、一朝一夕で、共和主義国家の成員とはなり得ない。

内憂を省みず、領土拡張政策をとり、準州を手に入れるとインディアン討伐隊を派遣することになる。南北が準州の取り合いを始め、法曹界は、建国の精神を無視して、奴隷所有者の私有財産権を守り、妥協に妥協を重ねて何ら解決策は出てこない。奴隷制も強化され、奴隷も自由になるためには、暴力に訴えるしかないと認識しはじめている。早晩この葛藤が表面化することは明らかであるのに、問題があるとも考えず、領土拡張戦争の戦果にうかれる合衆国市民に、通じないと知りつつ警告を発しているのである。そして、たとえ、擲楯も皮肉も通じない市民であろうと、その市民が主権者として決定することに、本来の意味での republican であるメルヴィルは、従がおうと告げているのである。

#### NOTES

1. Leon Howard, *Herman Melville: A Biography* (Berkeley: University of California Press, 1951), pp. 221-222. 事実関係はハワードによる。
2. F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York: Oxford University Press, 1941), p. 373.
3. John P. Runden, ed., *Melville's Benito Cereno* (Boston: D. C. Heath & Co., 1965).
4. Joyce Sparer Adler, *War in Melville's Imagination* (New York: New York University Press, 1981), p. 89.
5. Edgar A. Dryden, *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1969), p. 201.

6. John Seelye, *Melville: The Ironic Diagram* (Evanston: Northwestern University Press, 1970), p. 191.
7. R. Bruce Bickley, Jr., *The Method of Melville's Short Fiction* (Durham: Duke University Press, 1975), p. 101.
8. Seeley, p. 105.
9. Warner Berthoff, *The Example of Melville* (Princeton: Princeton University Press, 1962), p.p. 153. Cited by Bickley, p. 102.
10. Adler, p. 88.
11. Matthiessen, p. 508.
12. Sidney Kaplan, "“Benito Cereno”: An Apology for Slavery?" Taken from "Herman Melville and the American National Sin: The Meaning of ‘Benito Cereno.’" *The Journal of Negro History*, XLI (1956), pp. 311-338; XLII (1957) pp. 11-37, (Association for the Study of Negro Life and History, Inc. Reprinted by Runden, p. 173.
13. Marvin Fisher, *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850s* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977), p. 7.
14. Ibid., p. 10.
15. Dryden, p. 68.
16. Herman Melville, "Benito Cereno" in *Melville's Benito Cereno*, John P. Runden, ed. (Boston: D. C. Heath & Co., 1965), p. 86. Subsequent references are to the same edition and the page numbers will be cited in parentheses.
17. William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction: 1853-1856* (Athens: The University of Georgia Press, 1977), p. 227.
18. Ibid., p. 228.
19. Melville, p. 86.
20. Ibid., p. 86.
21. H. Bruce Franklin, *The Wake of the Gods* (Stanford: Stanford University Press, 1963), p. 137.
22. Ibid., p. 145.
23. Ibid., p. 152.
24. Eugene D. Genovese, *From Rebellion to Revolution: Afro-American Slave Revolts in the Making of the Modern World* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1979), p. xxiv.
25. William L. Van Deburg, *Slavery & Race in American Popular Culture* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1984), p. 7.
26. Eugene D. Genovese, *In Red and Black: Marxian Explorations in Southern and Afro-American History* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1984), p. 131.
27. Leonard L. Richards, *Gentlemen of Property and Standing: Anti-Abolition Mobs in Jacksonian America* (New York: Oxford University Press, 1973), p. 12.
28. Ibid., p. 110.
29. Ibid., passim.
30. *A People & A Nation*, vol. 1, eds. Norton, Katzman, Escott, Chudacoff, Paterson, Tuttle (Boston: Houghton Mifflin, 1982), pp. 343-344.
31. Eugene D. Genovese, *The Political Economy of Slavery: Studies in the Economy and Society of the Slave South* (New York: Random House, Vintage Books, 1967), p. 233.
32. Ronald T. Takaki, *Iron Cages: Race and Culture in 19th-Century America* (New York: Alfred A. Knopf, 1979), p. 124.
33. James Duban, *Melville's Major Fiction* (Dekalb: Northern Illinois University Press, 1983), p. 82.

34. Dominique Arnaud-Marçais, "Benito Cereno" in *Le Blanc et Le Noire chez Melville et Faulkner*, Viola Sachs, ed. (Paris: Mouton, 1974), p. 31.
35. Stanley H. Elkins, *Slavery* (1976 rpt, Chicago: The University of Chicago Press, 1959), p. 67.
36. ベンジャミン・クアレルズ, 『アメリカ革命と黒人』, 小川起功, 川成洋訳(東京: 国書刊行会, 1979), p. 55.
37. この解釈については, 拙論『『ホワイト・ジャケット』の中のアメリカ合衆国』, 大阪音楽大学研究紀要第23号, pp. 40-55を参照されたい。
38. Dryden, pp. 204-205.
39. Genovese, *Political Economy of Slavery*, p. 73.
40. Michael Paul Rogin, *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville* (New York: Alfred A. Knopf, 1983), p. 219.
41. Elkins, pp. 66-67.
42. Orlando Patterson, *Slavery and Social Death: A Comparative Study* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1982), p. 87.
43. Ibid., pp. 79-80.
44. Ibid., pp. 94-95.
45. Rogin, p. 215.
46. David Burner, et al, *The American People* (St. James: Revisionary Press, 190), p. 220.
47. Van Deburg, pp. 10-12.
48. Winthrop D. Jordan, *The White Man's Burden: Historical Origins of Racism in the United States* (1979 rpt, New York: Oxford University Press, 1974), p. 79.
49. Harold Beaver, ed., "Introduction" to Herman Melville, *Billy Budd, Sailor and Other Stories* (Harmondsworth: Penguin Books, 1983), pp. 32-33.  
Beaver はデラノがバボを女性的と見なしたとしているが, 筆者はバボの演技であると考えている。
50. Jordan, pp. 81-82.
51. Van Deburg, p. 16.
52. Ibid., p. 43.
53. Ibid., p. 61.
54. Ibid., p. 4.

(昭和60年11月8日受理)